



～季節だより～

奥多摩の秋

むかしの奥多摩の秋は、あっという間に過ぎ去って寒い冬がきてしまったような気がします。ところが最近では地球温暖化のためか、秋がすごく長く感じます。12月の初め頃まで紅葉が楽しめるように、季節の移ろいが変わってしまったようです。

食欲の秋の味覚は、柿・栗・きのこ・あけび・山ぶどう等々で、奥多摩の自然が作り出す自然の産物です。点在する集落では、主に干し柿づくりが盛んでした。ダムで水没しなかった地区では柿の木が大木になり、それに高齢化が進んで収穫がままならなくなったことで、家々の軒下に吊るす風景が見られなくなったのは、ちょっと寂しい気がします。

柿を収穫した後の皮むきは、子ども達を含め一家総動員での夜なべとなります。「お前は1年生だから20個むけ」、「誰々は高学年だから50個だ」などと親に割り当てられます。むいた柿は、素縄で吊るし、ヘタがとれて縄をかけられないものは、50センチ程の串に刺して軒下に吊るしたものです。

また、山に入ると栗の木がたくさんありました。

栗拾いも薄暗いうちから学校に行くまでの時間の子ども達の日課でした。兄弟で、また友達と競い合っけて拾ったりしました。多い時は5升も拾ってくることもありました。

たくさんあった栗林は、子どもたちには持ち主が誰かわかりませんでした。拾いに行くと怒られたり、ダメだなどと一度も言われたことがありませんでした。これも奥多摩の風景と同じで、のどかな時代だったようです。

秋の夕食後は、またまた子ども達の出番です。囲炉裏を囲んで自分のノルマを果たすために、真剣にあの独特な小さい山栗をひとつずつ歯でむきました。口の中に渋みがいっぱい広がります。でも、栗拾いから食べるまで、子どもながらに達成感がありました。それに、なにより嬉しいのは翌朝、母親の炊いてくれたクリメシの味で、忘れられません。

こんな楽しみのある奥多摩の秋が始まります。自分に合ったルート・日程等を検討してゆとりのある計画で安全な登山を楽しんでください。

(岡部秀雄)

～ 秋 さ つ せ ん ～

写真撮影・写生と自然観察

行先：小河内ダム周辺

開催日：10月28日(火)

今年から企画したイベントです。

奥多摩観光協会の登山・ハイキングのイベントでは、行程上の都合で写真撮影などは遠慮させていただいています。そのため、ゆっくりと写真撮影や写生をした方、自然観察をゆっくり楽しみたい方には、参加しづらいようです。

今回から始まったこの企画は、1日、あまり動かずじっくりと撮影、写生そして自然観察を楽しみます。

スポットとして用意したのは、次の2箇所です。奥多摩湖バス停から徒歩で行ける距離です。

- ① いつも奥多摩湖の眺望が楽しめることから「みはらしの丘」との名づけられたハイキングコース
- ② 小河内ダムと「いこいの路」

まず、「みはらしの丘」を紹介します。

入口から斜面を登ると八方岩展望台に着きます。満々と水が貯えた奥多摩湖を眼下に見られますので、

写生スポットを探してみたいかがでしょうか。写真撮影の方は、回遊できる歩道が整備されていますので、様々なアングルで秋色に染まる奥多摩湖を撮ることが出来ます。平日でもあり、観光客の往来はあまりありません。撮影、写生ともに素材には事欠かない景色が広がります。

次に小河内ダムと「いこいの路」を紹介しましょう。

ダムの上から下流側を覗き込みますと、その落差と、広がる景色に圧倒されます。撮影も写生も良しです。

ダムを渡りきると、その先にいこいの路が延びています。1.8キロぐらいまでは、広い道ですのでゆっくりと歩いて撮影ができます。湖面に映る紅葉も良い素材となるでしょう。

自然観察は、「みはらしの丘」で、植物に詳しいガイドとたっぷり時間をかけて楽しめます。

それぞれの楽しみが終われば、レストランや土産物店がある「水と緑のふれあい館」前に集合します。この施設には、水と緑に関しての展示のほか、奥多摩の山の暮らしや文化の展示もあり、また今年リニューアルした3Dシアターの映像も楽しめます。(渡辺幸治)

～ 行 っ て 秋 た ゃ ゃ ～

浮橋を渡って虫探し

去る7月29日、新コースである「奥多摩湖畔・麦山浮橋を渡って虫探し」に行ってきました。

当初、夏休み期間中なので子ども達が参加してくれることを期待していたのですが、大人ばかり10人の参加でした。童心にかえて「さあ浮橋を渡って大自然を楽しみましょう！」と、ワクワクしながらバスに乗り込みました。

バスに揺られ30分程で「峰谷橋」に到着。奥多摩湖に架かる真っ赤な橋の手前です。その橋を渡り、右の坂道を上がると、左側の石垣にイワタバコが群生し紫色の花をつけ、私達を出迎えてくれました。さらに下り小河内神社下へ出ました。眼下には「麦山の浮橋」が右岸まで続いていました。

昔は生活道、現在は観光道に変わりました。全長220mの浮橋を、ユラユラと揺られながらスリルと湖の景色を楽しみました。右岸に渡ると小道が「山のふるさと村」まで続いています。うっそうと茂る緑の中は、涼しくて別天地でした。植物観察や虫の

観察をしながら、40分コースを1時間以上かけて歩きました。ふるさと村の裏の川原に出ました。引続き、「ネイチャートレイルⅡコース」を歩きました。日指の森を通る古甲州道で、道端に、安政三辰年三月と刻んである馬頭観音が立っており、歴史を感じました。そして、ビジターセンターに戻り昼食をとりました。暑い盛りでしたが、木陰は涼風が吹いて快適でした。その後、湖畔の道を歩き、来た道を帰りました。

成果として虫では、ナナフシ・ヘビトンボ・カラスアゲハ等に出会えました。植物はたくさんあり、ツクバネ・ツノハシバミの実、ソバナ・ムラサキニガナの花等。野鳥では、ホオジロ・カワセミ・コサメビタキ・イカル等。

今回は、時間的にゆっくり観察ができ、参加者から好評でした。

こうして「大人の遠足」は大満足のうちに終了しました。

(武田和代)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その9 ～

「稲村岩」哀歌

都道「日原街道」の長いトンネルを抜け、右カーブを曲ると日原集落に入る。日原川の北側に開けた段丘の僅かな緩斜面に家々がへばり付き、急傾斜地には坂畑（サカッパタケ）が見える。その村の奥に守り本尊のように屹立し、村を見下ろしているのが「稲村岩」である。

稲村岩は釣り鐘のような形をした、石灰岩の山である。日原集落の足下を流れる日原川を挟み対岸に聳える稲村岩は、ドッシリとした安定感があり立派である。山容は岩が剥き出しの岩峰ではなく、山全体は樹木で覆われ、所々に岩肌を覗かせる慎ましさがいい。春は新緑に染まり、秋には紅葉する。古くから地元では「イナブラさん」と呼ばれて親しまれてきた。山に対しては「イナブラ」山上の神祠に対しては「イナブラさん」と呼んでいたようだ。今の登山地図にはただ「稲村岩」とだけ表示がある。

イナブラともイナボラとも発音されるが、稲束のことである。そしてその岩山の形容が、立木を芯にして稲藁を積み上げた形に似ていることからこの名がある。頭頂には農耕神「稲村山神社」が祀られ、今でこそ神事は行われなくなったが、昔は旧暦の10月24日の例祭日に、村人が「おしとぎ」と称する団子を献じ、新しい年の穀作の出来不出来を、神籤によって占っていたという。

鷹ノ巣山から北東に派生した急峻な尾根は、鷹ノ巣谷と巳の戸沢に挟まれた突端に稲村岩を立ち上げ日原川に落ち込む。奥多摩登山では、この稲村岩尾根コースが最も急登とされている。

8月の第2土曜日、日曜日、毎年この日は奥氷川神社、羽黒三田神社の祭礼があり、夜には納涼花火大会や御神輿巡行なども行われる一大行事で、奥多摩に勤務する警察官は総出でその警備に従事することになっている。

9日第2土曜日、午前11時41分、日原の稲村岩尾根を鷹ノ巣山に登山している男性から、携帯電話で110番通報が入った。内容は「稲村岩の肩にある分岐に、ストックが2本と赤いザックが木に立てかけて置いてあり、登って行く時にもあったし、いま下ってきたがまだ置いてある。人はいないので遭難したのではないか」というものであった。

祭礼警備があるので山内小隊長と佐藤隊員の2名が確認に登ることとなった。以前にも同じような通報があり出動したことがある。分岐に置かれたザックの持ち主を捜索するため、山岳救助隊が稲村岩を目指して登って行った。ヘリコプターまで飛ばして捜索していたところ、大学生2名が下山して来た。分岐に置かれたザックは、言い伝えのある鍾乳洞を、稲村岩の頭頂からザイルで下降しながら探していたこの大学生のものと判明した。

今回もその手の通報だろうと、確認のため出動した2名が日原駐在所まで来たところ、親子連れの登山者が駐在所を訪れ、「ここから鷹ノ巣谷を約30分ほど登った所で男性の遺体を発見した」と届けてきた。山内小隊長がその経緯を聞いた。

高校教諭であるKさん(55歳)は、今日息子(9歳)とともに午前11時ころ中日原から入山した。鷹ノ巣谷に入り滝や堰堤を越えて15分ほど登って行くと、午前11時30分ころ左岸から流入する巳の戸沢出合いの上流あたりで、上半身を水に浸かった男性の遺体を発見した。急いで下山し日原駐在所に届け出てきたものであった。

山内小隊長は奥多摩交番に電話で「先ほどのザックと同伴ではないか」と連絡してきた。位置的には稲村岩の真下あたりになる。私はすぐ出動する旨を伝えて、渡辺隊員と山岳救助車で日原に向った。私たちが中日原に着いたときには、先着の2名は現場に到着していた。無線で連絡を取りながらバスケット担架などの必要資材を持って、私たちも現場に向った。都道からいったん日原川に下り、巳の戸橋を渡り対岸の鷹ノ巣谷に入る。そこから15分ほど沢を上った堰堤の上で山内小隊長は待っていた。そこから30メートルほど上流に遺体はあった。シャツが胸までまくれ上がって仰向けに倒れ、頭部は沢の水に沈み、上半身の胸部は水面に出ていた。下半身は岸の川原に横たわりタイトの上には短パンをはいていた。まだ30歳代の男性のようだった。右足のトレッキングシューズは脱げ、近くに転がっていた。

左岸の急斜面を転げ落ちたのだらう、転落痕が見て取れた。斜面上部で佐藤隊員が遺留品の捜索をしているらしい。稲村岩の上から転落したものだらうか。稲村岩の高さは200メートル以上ある。そして左岸の急斜面だって100メートルほどはあ

る。その距離を転落したにしては遺体の傷みは少ないようだった。

刑事課員が到着し、実況見分が行われた。佐藤隊員も遺留品を回収し斜面を下降してきた。距離にして約 130 メートル上が稲村岩の基部で、その周辺に現金やクレジットカード、防水プラスチックケースなどの遺留品が散らばっていたというから、稲村岩の上から転落してきたのは間違いなさそうだ。

刑事課員の実況見分が終了し、遺体をバスケット担架に收容した。ザイルで確保しながら沢の中を滑り下ろす。小雨が降り出していた。

午後 3 時 36 分、遺体を日原街道まで搬送した。稲村岩の肩に置いてあるザックやストックは、渡辺、佐藤の両隊員が回収に登って行った。

その夜は祭礼の警備に当たった。小雨も上がったので予定通り花火大会も実施された。刑事課から連絡があり、昼間転落したのは都内 N 区在住の T さん (37 歳) で、稲村岩の肩に置いてあったザックなどは本人の物と確認できたという。死因は脳挫傷。頭蓋骨陥没、肋骨骨折などの所見があったから、相当に高いところから転落したものだろうという話であった。

稲村岩は釣り鐘状の山である。頭頂の祠のあたりから転落したとしても下まで落ちてくることは考えられない。今まで事故にしろ自殺にしろ、稲村岩の上から飛んだなどということは聞いたことがない。過去にもなかったことではないだろうか。

私は後日佐藤隊員と検証に稲村岩へ登った。日原街道から眺めると、対岸の稲村岩の基部あたりがこの道路とほぼ同じくらいの高さに見える。頭頂の標高は 920 メートルである。ザックのあった稲村岩の肩は、ちょうど頭頂の裏側である。いったん日原川まで下りて、右岸を登り返すと 40 分ほどで基部に着く。基部には日原の戸沢が流れている。このあたりが標高 680 メートルである。稲村岩を西側に回り込み、日の戸沢に架かる木橋の所から、ジグザクに約 15 分登ると標高 880 メートルの肩に着く。そこには大きな杉の木があり指導標が立っている。指導標は日原方向、鷹ノ巣山方向、稲村岩方向の 3 方向を示している。ザックや 2 本のストックなどは、杉の木に整然と立てかけてあったというから、T さんは鷹ノ巣山に登る途中、荷物はそこに置いて空身で稲村岩を往復してこようとしたことは明らかである。肩から岩稜を 10 分ほど登ると頭頂の祠に着く。小さな祠が日原

集落の方を向いて 3 つ並んで祀られている。祠の中にまだ新しい「平成 19 年、熊野大社参詣云々」と書かれた木札が奉納してあったから、まだ敬虔な信者が存在するのであろう。

頭頂から日原方向の見通しは、樹木に遮られてあまりよくない。緩やかな踏み跡が日原方向に続いている。それをプッシュに掴まりながら 50 メートルほど進むと、岩がデコボコしているのだが、見通しのいいバルコニーのような所に出る。ここからは眼下に日原集落が一望できる。集落から眺めると、頭頂直下にクラックの入った垂直の岩場が見えるが、あの上あたりだろう。ここから先は日原側にほぼ垂直に切れ落ちており、ザイルなしには進むことができない。T さんはここから過って転落したとしか考えられない。T さんの目に、日原川に沿って延びる集落の屋根、とぼうの採石場、その奥に地元で日原富士と呼ばれている、本仁田山のドームが美しく見えたことだろう。

岩の上に立ち写真でも撮ろうとしたものだろうか。200 メートルの空間を木々のクッションで落ち、基部で左に落ちれば日の戸沢、右に落ちれば鷹ノ巣谷。右に落ち、標高 600 メートルの鷹ノ巣谷まで一気に滑り落ちたものであろうか。

T さんは彼の稲村岩から星のように落ちた。原因は分からないが、落ちた場所は確認できたような気がする。私と佐藤隊員は日原の集落に戻った。

民家の茅葺き屋根越しに見る稲村岩は、よく写真や絵画に残っている。昭和 21 年 9 月、日原を訪れた文豪吉川英治は、「峯々々 嶺の中なる日原は屋の上屋の上に 秋草ぞ咲く」と即興に詠った。古くなった茅葺き屋根の上に、イヌタデカワレモコウ、ミズヒキなどの、やさしい秋の花が咲いていたのかもしれない。そしてその茅葺き屋根越しには雄々しい稲村岩が見えていたことだろう。

古来、茅葺き屋根の棟の上には、重しにイワマツを植えた。このイワマツは乾燥時には縮まって風通しをよくし、雨が降れば根も葉も広がって湿気を防ぐ役目をする。

道路脇に、古い茅葺きの民家が 2 棟ほど残っていた。その茅葺き屋根には見事なほどイワマツが生い茂り、ギボシやシノブなどの植物も乗っていた。いつも日原でその茅葺き屋根を見ると、懐かしい風景に出会ったような気がしたのだが、残念ながら今年その茅葺き屋根もトタンで覆われてしまった。日原名物がまたひとつ消えてしまった。

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(11)

氷川(ひかわ)は、JR青梅線終点奥多摩駅の付近一帯の地籍です。

駅前左手なだらかに下る坂の先に、東京都の天然記念物「氷川の三本杉」が天を刺すように聳えています。ここには氷川の鎮守奥氷川神社が鎮座しています。この神社は、武蔵三氷川の一つといわれ、埼玉大宮の一宮・氷川神社に対し、入間三ヶ島の氷川神社を中氷川といい、奥宮にあたることから奥氷川神社と称しています。旧は、奥氷川大明神と呼び、かつて和田村(現青梅市畑中、日向和田)以西の上流域の地を氷川郷と呼んでいました。

この郷名は奥氷川大明神の社号から起こっているといわれています。

武蔵国の草創期、国府(地方行政庁の所在地、現府中市)の建造物造営の諸資材として、巨樹、巨木などの木材や建物の礎石に使用するチャートの巨岩(俗称ヒウチ石)などが、多摩川の上流域から搬送されました。この資材を伐り出し、搬送するために職人集団と彼らを統率する役人たちが住み着いた地

域が、この氷川郷で、祖神の氷川神を祀り、地名にしたと考えられています。

奥氷川神社が鎮座する地域の大氷川(おおひかわ)は、奥氷川というべきところ、奥の音が「おふ」「おお」なので、村人が間違えて、大氷川というようになったといわれています。

奥氷川神社の例祭は、毎年8月の第2日曜日に獅子舞が奉納されます。前日の土曜日には、三杉会の神輿が繰り出して、大氷川の町内を練り歩きます。また、南氷川の山車も氷川大橋を渡って大氷川の町内へ繰り込んで来ます。夕刻からは、愛宕山山頂から花火が打ち上げられ、夏の夜空に彩りをそえます。

南氷川は、南とか宿(しゅく)とかいわれ、小河内や日原から運ばれて来る産物の取引が行われた所で、炭、梨子(なし=山梨、石梨)、木履(ぼっくり=下駄)、白簪などが取引されました。南氷川の鎮守は、羽黒三田神社で、例祭は、8月第2日曜日とその前日に行われ、屋台と山車の上で、賑やかにお隣子が演じられます。奥氷川神社と羽黒三田神社の夏祭りは、町内最大のイベントです。(岡部義重)

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

山の花だより

アワコガネギク

この花は、10月から11月末頃まで咲き、花の少ない季節なので良く目立ちます。山地のやや乾いた土手や崖の上、林のふちや道端に生える多年草で高さは70~150センチになり、葉は互生し、栽培されている菊に似ています。葉質は薄く茎の上部で枝分かれし、黄金色の頭花を多数つけます。花の咲き方が泡のように見えるので、アワコガネギクとなったようです。

初めてこの花に出会ったのは、本仁田山からゴンザス尾根を日向に下りた時でした。晩秋の日は西にかたむき、足は疲れてやっと車道に出てちょっと歩いた右側の草地にその花は咲いていました。

「あっ、この花きれい。何だっけ」と私が言った時「アワコガネギク」と教えてくれたのはハイキング仲間でした。

頭花は1.5センチ、京都の北山に菊溪と言う地名がありキクダニギクとも呼ばれています。

奥多摩むかし道のところどころにも咲き、白鬚神社を過ぎて、バス道路がすぐ右上に見える坂道の草地に、沢山咲いていたのを見たことがあります。それと中山に向かう登山道に入る手前の車道の石垣の辺りに、枝を垂らすように咲く姿がきれいでした。

霜が降りて、山々が色づく頃に、日当りの良い崖の上や道端に「寒さに負けないぞ」と言うような少し枯れ枯れの枝先に花を群れ咲かせていたりするので、とってもしなやかな花でもあります。

一番最後までがんばる花は、アワコガネギクかも知れませんが、まだその花を見たことのない人は、ぜひ晩秋の奥多摩にお出でください。そして日向のあの道にその花を見つけて、その後はもえぎの湯に入って帰られるといいかと思えます。

菊の香や 奈良には古き仏たち 芭蕉

アワコガネギクにも香りがあります。

(原 明子)

ガイドだより ～奥多摩雑感～

奥多摩町は都心より2時間位で来られる場所、心の底からのんびり出来る自然がいっぱいの町です。JR青梅線の終点・奥多摩は、周囲を山、又山に囲まれた静かな駅です。シーズンには、新宿から土日には直通電車が運行され、又、四季彩号に乗車して青梅～奥多摩間を味わうのも一興だと思います。

さて、奥多摩駅に降りて駅舎を見渡して下さい。なんと山の駅にふさわしい山小屋風2階建てです。このデザインは、大正時代流行した造り(中央線高架工事で解体された国立駅と同じ西洋風駅舎)です。

民営化さ

れ今、表面と横壁に丸窓が施され、この丸窓が国立駅の正面にもありました。大正末期ま



奥多摩駅

で民家でも取り入れられたそうで…。

駅前を見渡せば左に大木戸稻荷で、春には毎年安全登山を祈願する行事が行われます。前には、観光案内所、道路を隔ててバス停留所。見渡したところ、川はどこに?ここは河岸段丘になっていて崖の向こうは日原川。その横には町役場があるとは、なかなか気が付きません。ここは奥多摩工業(石灰石を採掘して販売)の社屋でした。バスは、日原(鍾乳洞)方面と奥多摩湖方面、タクシーで登山客も奥へと導かれる便利さも人気です。

現在、木材の売れゆきは伸びていませんが、ここ奥多摩では、地場の木材で造られたスバラシイ福祉会館があります。駅から2分の所ですので、立ち寄ってはいかがでしょう。木材の良さを見直す良い機会だと思います。

そしてこれから紅葉シーズン、11月の第1週日月には、ふれあい祭が毎年開催され、駅からシャトルバスも運行。「むかし道」や渓谷を楽しんだ後、地元の人情味あふれる物産品と芸能を堪能するもよし、根わさびを求め、自身のオリジナルワサビ漬を作る方法も教えてもらえるかも知れません。

自然の恵の大切さを学べる場所、それが奥多摩町です。

(宇津木 隆)

施設案内

☆山のふるさと村 『山 翳(ヤマセミ)亭』

山のふるさと村は、都民から「山ふる」の愛称で親しまれている自然公園です。

その中にレストラン「山翳亭」があります。特に奥多摩やまめを使用した「奥多摩やまめ丼」をお薦めします。マグロのトロ味と同様、食欲をそそります。価格は900円です。

開園時間：午前9時から午後4時30分

お問い合わせ 0428-86-2552

西多摩郡奥多摩町川野 1740 番地

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、秋から冬に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 11月5日(水) 奥多摩湖いこいの道に楽しむ
応募締切日 10月22日(ハイキング)
- ② 11月18日(火) 紅葉の倉戸山を訪ねる
応募締切日 10月22日(登山)
- ③ 11月26日(水) 鳩ノ巣 城山登山
応募締切日 11月12日(登山)
- ④ 12月12日(金) 深山に美しい樹形を訪ねる
応募締切日 11月25日(登山)
- ⑤ 12月16日(火) 冬の奥多摩の野鳥を探そう
応募締切日 11月25日(ハイキング)

* 募集人員：各回30名、参加費：500円

《 編集後記 》

秋の味覚を味わうのは地元が一番です。秋の夜長を奥多摩の宿で過ごしてはいかがでしょう。

次号は、平成21年1月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会